

生態学的変動と社会変動

—J・スチュアートとC・ギアツ—

間 苧 谷 栄

われわれが低開発国の経済発展の可能性を問ひ、真に効果のある開発政策を求めようとする場合、なによりもまずなすべきことは、所与の社会経済体制のなかで、国民的・経済的統合を阻み上昇的累積的發展を妨げている社会的隔絶と硬直性を誤りなく捉えることである。

このような観点から注目されるのが、インドネシア社会の硬直性の側面を明らかにし、その因を問おうとする、文化人類学者C・ギアツ (Clifford Geertz) の研究『農業のインボリューション——インドネシアにおける生態学的変動の歴史』⁽¹⁾である。ギアツは、インドネシア農業経済史の変動過程を生態学的な観点から究明することによって、経済発展の途上にたちはだかる困難な社会的・経済的諸条件を明らかにしようとしている。彼は、その変動過程を「インボリューション」⁽²⁾ (Involution) として捉えるのであるが、その場合に分析の方法として

援用してしているのは、J・スチュワード (Julian Steward) の「文化生態学」⁽³⁾ (cultural ecology) の方法である。

そこで、われわれがギアツの研究成果を誤りなく捉え、その意義を正しく評価するためには、ギアツが分析の方法として依拠しているスチュワードの文化生態学の方法を、スチュワード自身に立ち帰って検討することが必要であると考えられる。このことは、低開発国の経済近代化・政治的發展・文化変動を統一的に把握するための(分析枠組みとしての)社会変動論を構成しようとする努力にとっても意味があるであろう。

二

スチュワードの文化生態学⁽³⁾の概念は、彼の文化変動論を構成する(方法論上の)重要な操作概念の一つである。そこで、彼の文化生態学の概念を正しく把握するためには、なによりもまず、彼の文化変動論である「多系的進化」(multilinear evolution)の方法論がどのようなものであり、それを支える問題関心が何であるかを明らかにしなければならない。

スチュワードの問題関心は、文化の独自⁽⁴⁾な現象に関心を払い、それを無視することなく、反復して生起する(recurrent)現象に注目し、それを「文化的規則性」(cultural regularities)ないし法則として(あくまで経験的に)把握しようとする⁽⁵⁾ことである。この問題関心は、それを生み出した人類学の学説史的背景⁽⁶⁾を捉えることにより、より明確にされうるであろう。

まず、モルガン (L. H. Morgan) / タイラー (E. B. Tylor)

等の一九世紀の「一系的進化論」(unilinear evolution)は、(全文化に普遍的に妥当する)文化的規則性を発展段階として公式化しようと試みた。しかし、この場合、データの不足と方法論上の弱点が合わさって、文化の独自性は、普遍性追求の犠牲とされた。これに対して、次に現われたボアズ(Boas)学派を中心とする文化相対主義は、実証研究をふまえて、一系的進化論を徹底的に批判した。そして、時には規則性の存在そのものを拒否する傾向さえ現れたのであった。文化相対主義の関心は、文化現象の特殊性・独自性の把握に集中し、そのため文化現象の普遍的側面は著しく軽視された。文化規則性の公式化に対する不信感、その後長く存続したのであるが、再びボアズ学派の中からも——例えば、ローウィ(R. Lowie)のごとく——文化現象のなかに規則性を求める声が起こり始め、人類学の究極の目標は文化法則の発見であると広く確信され始めた。このような動向を背景として生まれたのが、スチュアードの「多系的進化論」の試みである。従って、多系的進化論は、一系的進化論と文化相対主義の双方に対して批判的立場をとるとともに、ある意味で両者のより高次の総合をはかろうとする意図をもつものである。

まず、多系的進化論は、一系的進化論が、すべての文化は進化の過程で同一の諸段階を経過するとア priori に主張する点を批判する。これに対して、多系的進化論は、多様な諸文化がどの程度類型概念で体系化されえ、発展過程の通文化的規則性(cross-cultural regularities)によって証明されうるかは、全

く経験的な検証にまつと考える。

次に、多系的進化論は、文化相対主義が、種々の社会で生じる文化現象の類似性(similarities)を、同一の起源ないし伝播によってのみ説明しようとする点を批判する。これに対して、多系的進化論は、伝播によって生じる文化の形態と内容の類似性を「斉一性」(uniformities)として捉え、これとは別に、現象間に同一の因果関係が独自に働いた結果(伝播とは無関係に)生起する類似性が、異なった文化領域や伝統に存在することを仮定し、これを「規則性」(regularities)と呼ぶ。多系的進化論は、この文化の規則性をあくまでも経験的に公式化しようとするのである。

スチュアードは、このような規則性を公式化するためには、次の三つの手順が必要であると考える。第一は、文化、型、制度の類型論が存在しなければならない。第二に、類型間の因果連関が、継起的・通時的(sequential・diachronic)に、あるいは、機能的・同時的に、あるいは、継起的かつ機能的に確定されねばならない。第三に、かかる因果連関が(通文化的に)独自に繰り返して生起することを確定しなければならない。このようにして捉えられた規則性が「通文化的類型」(cross-cultural type)である。

三

次に、「通文化的類型」を決定するためにスチュアードが提示している索出的(heuristic)諸概念を検討する必要がある。

第一のものが、「文化生態学」の概念に他ならない。文化生態学は、類似の環境における類似の適応過程から生まれる（機能的・同時的）通文化的規制性を求めるための方法であり、環境への適応によって文化変動がどのように引き起されるかを捉えようとする方法でもある。文化生態学の学的課題は、ある特定の環境に対する人間社会の適応が特定の行動様式を必要とするか否か（逆に、どの程度、種々の異なった行動様式を容認するものか）を確定することである。さらに、文化生態学の課題は、それが採用する文化概念からも限定される。すなわち、文化生態学は、（文化のすべての側面が相互に機能的に依存するという）ホリスティックな文化概念を排し、相互依存性の程度と種類は、すべての文化的諸特徴（features）で同一というわけではないという観点を前提としている。そこで、「生存諸活動と経済諸関係に最も密接に関連する諸特徴の布置連関」を「文化中核」（culture core）として捉え、その他の「副次的諸特徴」（secondary features）と区別する。文化中核には、かかる諸関係と密接に関連することが経験的に確定される社会的、政治的、宗教的パターンも含まれる。副次的諸特徴とは、中核に余り強固には結びつけられていない他の多くの諸特徴であり、純粹に文化的歴史的要因（任意の革新や伝播）によって決定される場合が多いものである。類似の中核をもつ文化に外面的に異なった相貌を与えるのは、この副次的諸特徴に他ならない。そこで文化生態学は、適応（つまり、文化的に規定された方法での環境の利用）に最も密接にかかわり合うことが経

験的に示される文化的諸特徴に、第一次的関心を払うのである。

このような観点から、文化生態学の研究は次の三つの手順で進められる。第一に、開発的（exploitative）生産的テクノロジーと環境との相互関係を分析する。第二に、（ある特定のテクノロジーによる）特定の地域の開発（exploitation）にかかわり合う行動のパターンを分析する。第三に、環境の利用に必要とされる行動のパターンが、文化の他の諸側面にどの程度影響を与えるかを確定する。この場合、両者が機能的にどの程度結びつくかは、純粹に経験的に検証されねばならない。

ところで、文化生態学の方法に関して最後に付言しておかねばならないのは、文化生態学で中心的位置を占める「文化中核」の論理的性格を、スチュアートが如何に考えているかということである。スチュアートによれば、文化中核は「素出的構成概念（Deictic device）であり、文化の普遍的特性に関する仮定ではない」のであり、通文化的意義をもつ文化中核は、普遍的具体的諸特徴をもちえないのである。したがって、スチュアートの文化中核は、まさしく理念型に他ならないのである。

ところで、通文化的類型は文化生態学的適応の概念のみによっては構成されえない。なぜなら、同一の地域においても、時代が異なれば、文化はたんに複雑になる（すなわち、量的に新しいパターンが現われる）のみならず、質的に新しいパターンが現われるからである。この点をとらえて、一定不変の環境は文化類型と無関係であると、おうおうにして主張される。この

ような批判に対して答えるためには、各時代、(period)によって代表される「社会文化的統合のレベル」(levels of sociocultural integration)を考慮に入れる必要がある。通文化的類型を決定するためには、第二に「社会文化的統合のレベル」の概念が必要とされるのである。

どんな文化の成長連続体(growth continuum)においても、形態は単に複雑になるだけでなく、新しい形の組織類型(organizational type)の継起(例えば、核家族、民俗社会、国家の如きもの)が認められる。社会文化的統合のレベルの概念は、このような歴史的発展における質的に新しいレベルの継起的出現を把握するための概念である。また、家族や群団の如き単純な形態は、より複雑な発展の段階においても全く消え去るわけではなく、たんに化石の如き様相で生きのびるだけでもない。新しい全複合形成の特化した・依存的な部分に漸次変化するのである。したがって、レベルの概念は、複雑な現代の社会文化体系の内部構造を明らかにするためにも(特にその文化変容を考察する場合に)役立つ概念である。

このレベルの概念も、なんらかの特定の進化論的継起を前提としない純粹に索出的な概念であることは忘れられてはならない。

さて、このような文化生態学的適応の概念と社会文化的統合のレベルの概念を総合して「通文化的類型」が構成される。すなわち、通文化的類型とは、文化生態学的適応の通文化的規則性により決定され、かつ、同一の社会文化的統合のレベルを示

すところの文化中核から成るのである。通文化的類型の概念は、かくの如く、生態学的適応の概念と社会文化的統合のレベルの概念を結びつけることにより、(文化現象における独自性を継起する段階にのみ求める)一系的進化論と(独自性を文化領域・伝統のみ求める)文化相対主義の双方を批判するとともに、両者を総合しようとする視点をこめて構成されたものであると云いうるのである。

四

ギアツは、(以上のようなスチュアードの多系的進化の方法論の主要な操作概念である)文化生態学の方法を援用して分析を進めているのであるが、スチュアードと全面的に見解を同じくしているわけではない。

まず、ギアツはスチュアードの文化生態学の方法を次のように利用している。すなわち、文化と環境の相互作用を検討するための従来の方法は、文化と環境をまず分離し、独立した統一体として捉え、然る後に両者の相互作用関係を問おうとしたために明確な結論に到達しえなかった、とギアツは考える。これに代ってギアツがとろうとする方法は、文化と環境(生物学的関係、物理的過程)を単一の分析体系である生態体系(ecosystem)に含めることにより、システムの内部的ダイナミックスやシステムの発展・変動を捉えるという形で分析を進めようとするものである。その場合に、システムを構成する要素は、文化と環境のいずれにおいても、明確な基準で厳選された諸特徴

でなければならぬ。そこで援用されたのが、スチュアードの文化生態学の方法であり、文化中核の概念であった。⁽¹⁶⁾ギアツは、「内インドネシア」(中部および東部ジャワ、バリ、ロンボック)において、(i)農業技術、(ii)生産諸関係、(iii)生産諸活動と機能的に密接に結びつく文化の他の側面のすべてで、インボリユーション(すなわち、既存の文化型が、その細部にわたる過度の加工のために、硬直的になるほど酷使される傾向)が進行したと考える。ところで、(iii)は村落レベルの民族誌的研究(特に、社会構造と文化型を扱ったもの)はほとんど皆無であるために、史料的には確定しえない。そこでギアツはスチュアードの文化中核概念を援用することにより、この問題を克服しようとした。すなわち、テクノロジーと生産諸関係で(少ないながらも存在する史料を駆使することにより)確定しえた変動過程と類似の過程は、他の文化の諸側面においても、それが文化中核を構成する限りにおいて、生起したと類推しようとするのである。⁽¹⁷⁾

しかし、ギアツはつぎの点でスチュアードを徹底した形で批判している。すなわち、ギアツによれば、スチュアードが生存活動や経済諸関係に最も密接に関連する文化の側面を「中核」と呼ぶ一方、残余の文化を(任意の革新や伝播によってではなく形成される)「副次的」なものとするのは、論点となつてゐることを真であると仮定して論を進めることであり、文化変動の原因を、技術や生産諸関係の変化に促される新しい適応の仕方に基づ本的に帰しようとするのは、「単なる偏見」であ

る。所与の社会経済体系の全般的変動のパターンを決するのが生態学的変動であるとはアプリアオリには言えない。そこで、「政治的、社会成層的、商業的、知的」変動が、生態学的変動と並んで、全般的な変動パターンの決定においてどの程度の比重を占めるかが、経験的に確定されねばならないとするのである。⁽²¹⁾

ところで、ギアツが自己のスチュアード批判の正当性を論証する方法は、方法論的視点からのものではなく、政策帰結的視点からのものである。すなわち、ギアツはスチュアードの文化生態学の背景となつてゐる多系的進化の方法論全体については何も言及していない。ギアツはインドネシアの経済開発について若干の可能な方策をあげ、それを阻んでいる諸条件を検討する。そして、その諸条件の真の性格を問い、それを生み出した原因を捉えるには、生態学的変動過程の分析のみでは不十分であることを指摘し、したがって政治的、社会的、文化的ダイナミックスを検討しなければならないとするのである。⁽²²⁾

ところで、文化中核の概念は、スチュアードの文化変動論である多系的進化の方法論において中心的位置を占めており、テクノロジー等により促される新しい適応の仕方に変動のメカニズムを求める考え方は、スチュアードの理論体系にとって極めて重要である。そこで、スチュアードを批判する場合には、変動の要因として、政治的、社会成層的、商業的、知的要因等々を、あれもこれもと列挙するだけでは、実は、批判にはならない。それでは、スチュアードが排したホリスティックな文化観

に逆行するのみである。スチュワードの見解を、単なる偏見とか論点の先取ときめつけるほどに徹底した形で批判するためには、批判する側にそれに代わる明確な文化観なり社会変動論がなければならぬ。

ギアツは、スチュワードの見解を、社会変動即生態学的変動と考えているものと捉えている。これに対して、ギアツは、(他の彼の諸々のインドネシア研究で明らかなのであるが)⁽²⁾社会変動を、次の四つの変動過程、すなわち、(i)生態学的変動の過程、(ii)権威の型の変動過程、(iii)都市化の型の変動過程、(iv)宗教パターンの変動過程で捉える立場を表明している。これは、社会体系を四つの下層体系——(i)適応機能を果す経済体系、(ii)目標達成機能を果す政治体系、(iii)統合機能を果す制度体系、(iv)潜在性機能を果す文化的・動機づけ体系——で捉える観点を示すものと解されよう。このような観点に立つギアツにとって、スチュワードの文化変動論は、適応機能を受けもつ下位体系における変動が、社会体系全体の変動を説明しようとするアオリに断定するものと映じたのであろう。しかし、ギアツが彼のスチュワード批判の正当性を主張するためには、この四つの下位体系の相互作用関係を、インドネシアの場合に明確に捉え、それを通して変動のメカニズムを明らかにしなければならぬ。しかし、彼の現在の研究段階では、各変動過程が別個に検討されるにとどまり、それぞれの間の相互作用関係は未だ明らかにはされていない⁽³⁾。しかし、ギアツのインドネシア研究を支える問題関心が、経済合理化と結びつく社会・文化変動の

「規則性」を明らかにすることであり、かつその規則性を、(1)バロンズの型変数に依拠する(2)高度に一般化された二分法概念による類型論で捉えるのではなく、「より現実的で多様化された類型論」で捉えようとする(3)スチュワードの多系の進化論と相似した観点を示しているだけに、ギアツの今後の研究には興味を寄せられるのである。

(1) C. Geertz, *Agricultural Involution: The Processes of Ecological Change in Indonesia*, University of California Press, 1963, 176 pp.

(2) この概念については、拙稿「クリンキード・ギアツのインドネシア研究——ギアツ理論の全体系的考察——」『アジア研究』一三巻・三号(昭四二・一〇)三三一—五八頁。

(3) Julian Steward, *Theory of Culture Change: The Methodology of Multilinear Evolution*, University of Illinois Press, 1955 (3rd Printing, 1961), 244 pp.

(4) *Ibid.*, pp. 180-183.

(5) *Ibid.*, pp. 11-29; pp. 178-180.

(6) *Ibid.*, pp. 16-18. Morris Opler, "Cultural Dynamics and Evolutionary Theory," in H. R. Barringer et al (eds.), *Social Change in Developing Areas: A Reinterpretation of Evolutionary Theory*, Schenkman Publishing Company, 1965, pp. 68-96.

(7) J. Steward, *op. cit.*, p. 88.

- (8) *Ibid.*, pp. 180-182.
- (9) *Ibid.*, p. 89.
- (10) *Ibid.*, p. 5; pp. 30-42.
- (11) *Ibid.*, p. 37.
- (12) *Ibid.*, p. 89.
- (13) この点に關して「ノーマン (Morton H. Fried) は「*スチューブンの文化*」中核概念が「三種あり、混乱している状態に於いては、その秩序は用いられない。Morton Fried, "Ideology, Social Organization and Economic Development in China: A Living Test of Theories", in R. A. Manner (ed.), *Process and Pattern in Culture: Essays in honor of Julian H. Steward*, Aldine Publishing Company, 1964, pp. 47-62.
- (14) J. Steward, *op. cit.*, pp. 43-77.
- (15) *Ibid.*, p. 89.
- (16) C. Geertz, *op. cit.*, pp. 1-10.
- (17) *Ibid.*, pp. 101-103.
- (18) J. Steward, *op. cit.*, p. 37.
- (19) • (20) • (21) C. Geertz, *op. cit.*, p. 11.
- (22) *Ibid.*, pp. 143-154.
- (23) スチューブンは明確に概念規定はしてゐないが、「文化」を「社会」を内に含む上位概念として使つてゐるようなので、彼の文化変動論という用語は「キアツの場合の社会変動論と同じ意味で使つた」と考えられる。キアツは社会体系と文化を明確に區別する。C. Geertz, "Ritual and Social Change: a Javanese Example," *American Anthropologist*, Feb. 1957, pp. 32-54.
- (24) 上掲註稿参照。
- (25) C. Geertz, *The Development of the Javanese Economy: A Socio-cultural Approach*, Center for International Studies, M. I. T., April 1956, pp. 2-4.
- (26) 上掲註稿。
- (27) C. Geertz, *Peddlers and Princes: Social Change and Economic Modernization in Two Indonesian Towns*, The University of Chicago Press, 1963, p. 146.

(一橋大学大学院学生)